

## 感受性と自己認識 スタンダール『エゴチスムの回想』管見

高木, 信宏

<https://doi.org/10.15017/9961>

---

出版情報 : Stella. 14, pp.69-82, 1995-03-30. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



# 感受性と自己認識

——スタンダール『エゴチスムの回想』管見——

高 木 信 宏

『エゴチスムの回想』がいまなお興味つきめ読み物でありえるのは<sup>1)</sup>、たんにその伝記的な資料としての価値ばかりではなく、『赤と黒』でジュリヤン・ソレルの生涯を軸に7月革命前夜のフランス社会を鮮やかな手つきで形象化したスタンダールが、自身の生涯の一時期を語るにあたって、身近な人間関係を俎上にあげながら独断をおそれぬ率直な語り口で、政治・社会にたいする炯眼をいかんなく発揮しているためでもあるだろう。当初の執筆計画では対象が、社会情勢の点でも、また作家個人の文学的なキャリアにおいても豊富な題材がそろっている、1821年から1830年までのパリ滞在であっただけに、作品のごくはやい段階での執筆放棄の理由がなんであったのかを問わずにすませることはできない。もっとも、「暑さ」の到来のほかには作者自身さしたる証言を残していない以上、放棄の理由はテキストの分析をとおして推しはかるしかないだろう。本稿では、スタンダールがこの自伝的なエクリチュールの試行錯誤のなかで採った自己認識の方法を探り、執筆の動機から放棄にいたる過程の一端をあきらかにしたい。

## 1

『エゴチスムの回想』の執筆は、1832年当時スタンダールがおかれていた精神的状況と切り離して考えることはできない。1831年にローマの外港チヴィタヴェッキアに領事として赴任後まもなく、作家はひどい熱病を患ってしまう。病状は思いのほか悪く、およそ2ヵ月にわたった。友人への手紙でたびたび「苦痛」と「弱気」が訴えられる。一時は死の不安さえ頭をよぎることもあったようだ<sup>2)</sup>。病による健康状態の衰えは、やがて作家に「古い」の不安を

もたらしたのであろうか。執筆開始の1週間ほど前には友人のドメニコ・ディ・フィオリに、「右足に痛風の発作がありました。50代が近づいています」と書き送っている<sup>3)</sup>。しかしこの時期、肉体面での不安以上にスタンダールの「古い」意識をいっそう深刻なものにしていったのは、「ペストのように疎ましい」日常だったにちがいない<sup>4)</sup>。数人のイタリア知識人とのおつきあいを除けば、パリのサロンのような社交の場はむろんのこと、無聊をなぐさめる芝居も音楽会もない田舎まちでの生活。おまけに1832年当時は、小説の創作をしようにも「職務上のやむをえないつまらぬ仕事」[430]のために想像力を十分に働かせることもできない。そのような日常にたいするスタンダールの危機感がどのようなものであったのかは、2年後のソフィー・デュヴォーセル宛書簡からおよそ窺い知れよう。

あなたに会わなくなって、つまりパリを離れてから1年がたちました。こうして、この孤独の海辺で生き、そして死なねばならないのでしょうか。わたしにはそれが怖い。もしそうなら、倦怠と、自分の考えを誰ともやり取りできずにいることのために、完全に頭が鈍くなって死んでしまうことでしょう。<sup>5)</sup>

こうしてみると、1832年の回想の対象となるのが、外交官としての砂をかむような生活とはもっとも対照的な、1821年から1830年までのパリ滞在——知的刺激にみちたサロンでの交友関係、クレマンチヌ・キュリアル、アルベルト・ド・リュバンプレとの恋、作家としての旺盛な活動などに彩られた時期——であるのも納得がいく<sup>6)</sup>。『アンリ・ブリュエールの生涯』で自己の起源まで遡って「知性」と「感情」の形成が見つめなおされるまえに、それらを錆びつかせないための差し迫った必要として、失われた「交際」が主題として記憶のなかに求められた、といえようか。同じ必要から記述の面ではメッセージを受けとる読者の存在が強く意識されることになり、「未来の読者」へむけたたび重なる呼びかけや、事実ではなく「真実」を伝えるために「手紙みたい」に書くことが特徴として顕著となったのであろう<sup>7)</sup>。じっさい、『エゴチスムの回想』執筆に先だつ時期、かつてのパリの仲間からの音信がとぎれがちだった事実もまた、そのような作家の内面を理解するうえで無視することはできない。1832年6月11日付アドルフ・ド・マレスト宛書簡の冒頭——「4月28

日付のお手紙受けとりました。昨年わたしは何度も、あなたや、ロロ、あの気の毒なランベール、そしてバラールに手紙を書きました。返事なし。とりわけあなたは、文通にうんざりしているのだと思っていました」<sup>8)</sup>。

だが、スタンダールを脅かしたものは、倦怠のうちに老いてゆく不安ばかりではなかったろう。この年4月、パリでコレラが猛威をふるう。犠牲者は下層階級ばかりではない。交際のあった博物学者キュヴィエ、外相モレ伯の娘の訃報が届く。スタンダールがまだ恋心を断ちきれずにいた、ジウリア・リニエリ・デ・ロッキまでも罹病してしまう<sup>9)</sup>。いずれイタリアも他人ごとではなくなるだろう。もしそうなれば、この不潔な港町などひとたまりもあるまい、そうスタンダールは考えたのであろうか。プロスペル・メリメに治療法を問いあわせ、またこの疫病にかんする書物入手する。前年の熱病のつらい経験も、その脳裏にはよみがえっていたのかもしれない。

おそらくこの出来事は、チヴィタヴェッキアの生活に倦んだ作家の心理に「死」の影を落としたのではあるまいか。すくなくとも、この頃より「死」は作家にとって遠い先の出来事とは感じられなくなったように思える。そうでなければ、『エゴチスムの回想』に遺言を、はやくも執筆開始の翌日にしたためるというスタンダールの行動をいったいどう説明したらよいか<sup>10)</sup>。問題は、晩年を自覚した作家が自伝的なエクリチュールを試みることで、「老い」や「死」への不安をどのように克服しようとしたのか、という「情動的な動機」を理解することであろう<sup>11)</sup>。つぎに引用するのは1832年6月12日付ディ・フィオリ宛書簡の一節である。

わたしはこの地に島流しの身なので、最後にパリに遊んだときの話、つまり1821年6月から1830年11月までの話を書いています。この動物のあらゆる弱点を描くのは楽しい。わたしはすこしも手加減をくわえません。<sup>12)</sup>

自虐的なことば遣いながらも文面からは、自分にたいして客観的な距離をとろうとする作家のかたい意志がたわってくる。スタンダールは甘美な追憶の悦びのうちに現実からの逃避をもくろんだのではなかった。自己認識は他者の視点を意識して企図されたのであり、その目的は『エゴチスムの回想』のつぎの2つの文章と照らし合わせることで具体的に知ることができる。

さて、こうしてペンを手に内心の検討をおこなうことによって、わたしはなにか確かなもの、自分にとって永く真実として残るようなものに到達しえるものだろうか。

[430, 強調スタンダール]

もしこの本が退屈なものなら、2年もすれば食料品屋のバターのパッケージになるのがおちだ。退屈でないとすれば、たとえエゴチスムにもせよ、真摯なものは、人間の心を描く方法のひとつであることを人は理解するであろう。人間の心にかんする知識において、われわれは1721年以来長足の進歩をとげている。[487, 強調スタンダール]

自己探究によって、個人的な次元の関心にとどまらず、人間の心にかんする後世の評価に耐えうるような「真実」、あるいは「方法」を提出すること。この意味で「未来の読者」は、知的交流のシミュレーションにおける実在の友人たちの代替物としてではなく、作家の死後に時間を超えた普遍性を約束する保証人としての性格をもつことになろう。スタンダールによる「時間」と「死」の克服の最初の企ては、ロマネスクな創造が思うにまかせないチヴィタヴェッキアの倦怠のなか、そのような瞬間の成就を夢みて試みられたのではなかっただろうか。もちろん、スタンダールは自らの方法に確信をもって筆をとったのはあるまい。それは文字どおり、ひとつの「賭」にはかならなかった——「かりに20年後としたら、そのころには生活のニュアンスがことごとく変わってしまっているだろうし、読者の眼にはいるのは、その総体 (masses) ばかりということになろう。ところで、このペン1本の賭のいったいどこに賭金 (masses) があるのか。これは検討すべき事柄だ」[509, 強調スタンダール]。

## 2

『エゴチスムの回想』のテキストは途中、公務による中断を含め、1832年6月20日から同年7月4日までの14日のあいだ書きすすめられた。回想の対象となったのは、「1821年6月21日から1830年11月」までという当初の予定とは異なり、じっさいには執筆の突然の放棄のために1822年の夏の段階までとなっている。草稿には時おり執筆の日付が書き込まれているので、おおよその執筆の経過もわかっている。それによると、いくつかの例外的な箇所をのぞき、執筆作業と内容の配列順序は並行していると見做すことができる。このこ

とを踏まえて、テキストを「回想という作業そのものの記録」と呼んでも差し支えないだろう<sup>13)</sup>。ところで内容については、即興的な記述スタイルゆえか脱線も少なくはなく、その構成は逸話や人物の肖像が主題ごとに思いつかれるまま、時間的な順序にどうにかおさまっているといった印象をあたえる<sup>14)</sup>。換言するならば、人生をその展開において捉えるためには物語としての秩序だった構成が充分ではないのだ。フィリップ・ルジュンヌが『エゴチスムの回想』を「自伝」ではなく、「自己描写的な試み」と位置づけたのも、おそらくその意味をも踏まえてであろう<sup>15)</sup>。

では、ただちにこの「小さな覚書き」を自己描写と呼べるのかということ、ためらいが残るかもしれない。むろんそれは、テキストの冒頭ちかくで語り手が、「わたしとはなにか」という自己描写特有の命題に答えることが自分には不可能であるかのように表明しているからではあるまい<sup>16)</sup>。「わたしはどういう人間なのか。わたしには分別があるのだろうか。[...]じつをいって自分にも全然わからない」[429-430]。『アンリ・ブリュラーの生涯』のなかでも再び記されるこの種の表明は、むしろ不可能性こそスタンダールの自伝的エクリチュールの糧であることを逆説的に示していよう。定義づけへの居心地の悪さは、かすかながらもテキストのなかに物語的な構図が透けて見えるところからくるのではないだろうか。

まず『エゴチスムの回想』を読みすすむ者は、回顧的な視点をとる語り手の「わたし」と過去の「わたし」との差異、つまり両者のあいだの内的な隔たりを意識せずにいられないはずだ。第1章で語り手は、すでに自分が晩年の心境にあることを述べている。

わたしは49歳だ。多くの波瀾を知った今となっては、せいぜい大過なく人生を終えることを考える時節だ。[430]

一方、1821年の「わたし」といえば、恋の痛手を「心ひからびた友人たち」に見ぬかれまいとして機智を弄するようになるが、観察眼はまだまだである。そんな「わたし」を省みて、語り手が〈20代の青年〉にみたてているのに再三出くわすであろう。

1821年には、わたしはその年ごろらしいひたむきな気持ちでこの2人に関心しきっていた(なにぶん、心情的にころりと騙されるという点では、わたしは当時せいぜい21歳の青年なみだったのである)。やがて彼らの正体を見抜いてしまうと、わたしのトラシー氏崇拜も大幅に割引きされざるを得なかった。[458-459]

青年の常で(1821年といえば、わたしはほんの20歳の青年並だったことを思い出していたきたい)、これほど先方に心酔しているのだから、彼女も自分に愛情をもってくれてもよさそうなものだ、と当初は思っていた。今にして思えば、彼女はあまりにも冷静かつ理の勝ったひとだったし、熱にも情にもやや乏しかったから、かりに恋愛感情があったとしても、2人の仲は長続きしなかったろう。[492]

語り手とかつての「わたし」との、少なからぬ内的な隔たりは、「1832年6月の今、わたしはこれを書きながら初めて理解するのだが」[434]といった表現に代表される語り手の洞察、かつての「わたし」にたいする透過的な視点からもあきらかであろう。ところで、このような2者の内面の隔たりは、とうぜん物語をかたちづくるひとつの主題を予想させることになる。それは、「成熟」あるいは「円熟」とでも呼べる内的な変化・推移である。もし執筆が放棄されていなかったなら、内面の変化は回想される時間の展開のなかで顕在化すべきものであったはずである。その意味で、回想される「わたし」の変身願望も、内的変化の主題形成に与かるモチーフとして見逃すことはできない。1821年にロンドンへ旅立つ前の心境——「わたしは絶望していた。もっと正確に言えば、パリの生活に愛想がつき、さらになによりもまず自分自身に愛想がついていた。あらゆる欠点がある自分にあると思え、なれるものなら別の人間になりたかった」[474]。だが、「円熟」の主題をよりいっそう予測させる決め手となるのは、語り手が「わたし」の変化の転換点を仄めかず、つぎのふたつのくだりであろう。

彼がわたしから遠ざかろうとし、口のきき方までぞんざいになりはじめたのは、1826年9月15日にわたしがおそろしい不幸に見舞われて以後、わたしに才気があるという評判が立つようになってからだ。[435-436]

それにそのころ、わたしはまだ才気を弄する術を知らなかったわけである。平静な心から生まれるそんな即興は、1827年になるまでわたしには不可能だった。[447]

このように見てくると、不幸の経験が心のあり方を変える決定的な契機となって、現在の才知と洞察力をもつ「わたし」の内面に近づく歩みが始まった、という展開を想像できよう。

さて、スタンダールの伝記的な事実と照合せずに、あえてテキストの情報からのみ、おおよその物語的な図式を抽出してみたわけだが、例としてあげたいいくつかの引用はじっさいには編年史的な秩序に従って配置されてはおらず、テキストのなかで散在している手がかりにすぎない。したがって、『エゴチスムの回想』は——たとえスタンダールを知らない読み手にとっても——様々な出会いと別れの追憶によって「わたし」の軌跡をたどる物語、つまり「いかにして現在のよなわたしになったのか」という物語としての下地を潜在的に備えてはいる、そうとりあえずはいえようか。では、なぜいったいなぜスタンダールはこの物語を発展しえなかったのであろうか。

### 3

では、視点をかえて、この問題を作者の執筆時の心境にそくしながら考えてみるとしよう。まずあらためて問わねばならないのは、晩年の意識において38歳の自分を〈20代の青年〉にたとえることの意味である。自分を話題にする羞恥心のためか。あるいは、現在の自分との内的な隔たりを際立たせるためか。しかしながら、つぎに挙げる例のばあい、必ずしもそうした理由からではないように思える。

それは、わたしの孤独の時間をたえず蝕みつけていたあの不幸に対する、真の、そして奥深いところからくる最初の慰めだった。見られるとおり、1821年には、わたしはほんの20歳の青年だった。洗礼証明書の記すところによれば、当時のわたしは38歳ということになるらしいが、もしその通りの年齢だったとしたら、わたしは好意を寄せてくれるパリの堅気の女性たちを相手に、この種の慰めをえるように努めることもできたはずではないか。[486]

第6章、ロンドン郊外の娼婦の挿話につづいて語られるこの告白は、スタンダールの感受性のあり方をもっともよくあらわす例のひとつであろう<sup>17)</sup>。なるほどたしかに、客観的な視点から、まず「わたし」の「未熟」は捉えられてい



る。が、納得できず、ただちに語り手は自問する。「とはいうものの、はたしてそういう成功を収めえたかどうか、ときどき疑わしい気持ちにもなる。いわゆる上流社会風というやつ […] これは多くのばあい自分にとっては唾棄すべき気取りと思われるし、一瞬の間にもせよ、わたしの心をぴたりと閉ざしてしまうものなのだ」[486]。スタンダールが見いだすのは昔と変わらぬ自分である。やはり他の慰めなど不可能だったのであり、それは今現在も同じなのだ、と。過去の自分にたいしてとってきた客観的なスタンスに、ここで迷いが生じたのであろうか。数行において、「人は一切を知りうる、自分自身を除いては」と書かれている。

しかしながら、回想の現在においてかつての心の振幅に共鳴すること、言い換えるならば感受性の一貫性の確認、それもすぐれて自己認識の方法であるといえるのではないか。しかも、自身の内面の「真実」を時代の風俗にむすびつけて提示すれば、生きた証言ともなるであろう。おそらくスタンダールは客観的な自己分析とは異なる自己呈示の方法にはじめて確信をえたのではあるまいか。「たとえエゴチスムにもせよ、真摯なものは、人間の心を描く方法のひとつである」という、あの有名なくだりが置かれるのは、このすぐ後である。すると、この例での〈20代の青年〉という表現にこめられた意味あいが眩下的な域をこえて、スタンダールの〈感じやすい魂 (âme sensible)〉を射程に捉えうることも充分考えられよう。

感受性と年齢の譬えの対応は、べつの例でたしかめることができる。たとえばリュサンジュの偽名で登場するマレスト、この「もっとも冷淡 (le plus sec) で、もっとも無情な (le plus dur)」友人のばあい、対照的につぎのように紹介されている。

リュサンジュは当時36か37だったが、頭や心にかけては55歳というところだった。自分の一身にかかわる事件以外には、深く心を動かされるということがない。が、いったんそういうばあいになると、ちょうど結婚のときがそうだったが、すっかり逆上してしまう。これを例外とすれば、平生彼が冷笑してやまないのは、感情を動かすことだった。[436]

年齢の比喩が人物の感受性のあり方と結びつけられているのは、やはり否定しがたい。残る問題は、なぜスタンダールが「感じやすい魂」と「無感動な心」

を描きわけするために年齢の比喩をもちいたのかという点にあらう。執筆当時の作家の心境を思いおこすならば、おそらく「50歳」という数字は「老い」、すなわち感受性の衰えのはじまりを意味するものだったと思われる。そのような作家の考えは、たとえば「いずれわたしがだいぶ年をとり、感情も冷えきったとき (quand je serai bien vieux, bien glacé)」[432]、メチルド (マチルド・デンボウスキー) との恋のあらましを語る勇気をもてるだろう、といった語り手のことばにも窺えるが、1832年6月11日付のマレスト宛書簡のなかでより明確に述べられている。

50歳の男ふたりは、あらゆることについて語り尽くしましたし、政治の点では同じことを望んでいません。それゆえ、手紙を書くのが嫌になってしまう。これほどもっともなことはありませんし、これほど非礼でないこともないわけです。つまり、それは老いの到来であり、感受性が去っていつているのです (c'est l'approche de la vieillesse, la sensibilité se retire)。<sup>18)</sup>

さらに、翌日付のディ・フィオリ宛の手紙に見られる「50代が近づいています」という文章と考えあわせても、肉体の衰えや倦怠といった、チヴィタヴェッキアでの外的・内的な状況が、スタンダールに「50歳」という年齢にたいする強迫観念にも似たこだわりをもたらしていたのは疑えまい。無情な時間に抗して青年時代より変わらぬ内的な同一性を確認する、おそらくそれが〈感じやすい魂〉の形容として年齢の譬えがもちいられた所以であらう。

したがって、スタンダールは〈20代の青年〉という比喩を、語られる「わたし」の内的な推移・発展のいわゆる「目印・標点」としてのみ使用したわけではないことになる。じつのところ、この譬えは、語り手にとって人間関係などにおける洞察力が問題となるばあい (われわれが本稿第2章でとりあげた2つの例がそれだが)、消極的な「未経験」を意味し、また回想される「わたし」の感受性そのものが意識されるばあい (ロンドン娼婦の例)、「繊細さ・感じやすさ」といった積極的な価値を帯びる、といえようか。しかも、語りの遠近法において前者は「内的な隔たり」として、後者は「内的な同一性」を示すことはいうまでもない。このようなひとつの比喩をめぐるスタンダールの2種の観点は、ジャン＝ピエール・リシャルが指摘した作家の二元的な要請として理解することができるであらう<sup>19)</sup>。すると、すでに仮構した物語的な構図は洞察

力の「円熟」の軌跡であり、スタンダールの精神生活の一面しか捉えていないことがわかる。

ところで、この2種の観点にかんして、『エゴチスムの回想』第10章の執筆が終了したあとで、じつに興味深いことがおきる。スタンダールはそれまで書いたものを読みかえたのであろうか。とにかく、全体的な構成にかかわる重大な修整をほどこしている。第2章の後半部分が切り離されて、それをもとに第11章がつくられるのである。そこで主題となっているのは、ベルトワ夫人（クレマンチヌ・キュリアル）への恋、叔父ロマン・ガニョンによる恋の手ほどきなどであるが、うち後者は周知のように後年『アンリ・ブリュラルの生涯』のなかで再びとりあげられるものだ。いちおうこの変更は、ベルトワ夫人との出会いのエピソードを全体的な時間の流れに合わせるためになされたと考えられる。しかし同時に、この移植についてベアトリス・ディディエが、作家は幼少年期まで遡る必要を感じ、それをいっそう発展させるつもりだったのではないかと仮定しているように<sup>20)</sup>、主題じたいスタンダールの自己同一性にたいする強い関心をひくものであることも確かだ。はたして、題材の配列順序の整合性のためだけに、問題箇所の移動がおこなわれたのであろうか。むしろ、内心の検討をつづけるうちに、スタンダールがこの部分のもつ重要性を見いだしたとは考えられないだろうか。移植がなされる前、この章はつぎのように終わっていた。

この大戦略家の忠告を肝に銘じていたら、どんなに幸福をつかめたことだろう。が、じっさいには、どれほど多くの成功を逃し、どれほどの屈辱を忍んだことか。とはいえ、もしわたしが巧者に立ちまわる男だったとしたら、もうとっくに反吐が出るほど女に飽き飽きしてしまっているはずだ。そしてまた当然、当代人の2典型ラ・ロジェール氏やペロシャン氏のような人物みたいに音楽にも絵にも飽きてしまっていただろう。そうなるどころか、わたしは幸せなことに25歳の時と同じように目が眩んでいる (j'ai le bonheur d'être dupe comme à 25 ans)。[強調は引用者]<sup>21)</sup>

恋の巧者になれぬかわりに、自分は恋に生き、音楽や絵画を享受できる。まさに、スタンダールの墓碑銘（第6章）を想起させる一節といえよう。また、現在時制の文に置かれた「25歳の時と同じように」という年齢の比喩がじっさいには執筆のはやい段階で書かれていた点から、やはりスタンダールは自分の

感情生活を物語的な展望で捉えていないことが裏付けられる。しかも注目すべきことに、移行の際、この強調箇所に加筆がほどこされるのだ。

そしてまた当然、当代人の2典型ラ・ロジュール氏やペロシャン氏のような人物みたいに音楽にも絵にも飽きてしまっていたらう。彼らは感情において涸渇し、厭世家で、哲学者だ。そうなるどころか、わたしはおよそ女のことにかんするかぎり、幸せなことに25歳の時と同じように目が眩んでいる。[519, 下線は加筆部分]

最初に加筆箇所は対立的な性格をより厳密に描くことで、繊細な感受性が恋の戦略家に不向きであることを含意することになる。が、より重要なのは後者の方である。というのもこの加筆は、スタンダールが自身の洞察力の「円熟」を充分意識したうえで、自らの内的同一性の根拠を〈感じやすい魂〉としていることを示しているからだ。つまり、すでに検討したスタンダールの2つの視点がここに反映されているのである。移行箇所全体のもつ重要な性格を考えあわせるならば、この時スタンダールの関心が分析的な自己把握より以上に、感受性の認識の方へ比重を大きく移してしまったとはいえないだろうか。というのも移植箇所の後につづけて、スタンダールは新しくつぎのようなくだりを書きくわえているからだ。

こういうわけだから、なにもかも厭になり、人生にも飽きてピストル自殺を遂げるなどということは、わたしのばあい、起こりそうもない。文学者としての生涯でなすべきことは、まだ無数にある。できそうな仕事もたくさんあるし、それは10の人生を満たすに足りるほどだ。[519]

文学者としての意欲的な表明、それが〈感じやすい魂〉の同一性の揺るぎない確信をもとになされたといって過言ではあるまい。倦怠と晩年の意識が執らせた回顧的なエクリチュールにあって、突如、未来にむけて展望が開かれたといえようか。

ところが、つづく第12章、「暑さのために考えが浮かばなくなった。1時半」[521]と草稿の余白に記し、スタンダールはペンを置いてしまう。このあっけないくらい唐突な放棄は、あらたなかたちでの創作意欲がおとずれて『エゴチスムの回想』執筆の熱を奪ってしまったためなのだろうか。それとも

やはり、方法をかえて〈感じやすい魂〉を起源に遡って検討する必要を感じたためであろうか<sup>22)</sup>。いずれにせよ、この追加箇所は、回想するスタンダールの現在の物語、つまり語り手の「わたし」を主人公とする自己探究のひとつの区切りを示しているように思えてならない。

## 結 語

スタンダールにとって『エゴチズムの回想』は一時的にせよ精神の危機的状況を打開し、自伝的エクリチュールによる自己認識を方向づけるものとなった。この作品の文学ジャンルとしての見極めが困難なもの、ひとえに未完のまま放棄されたためばかりではないといえようか。テキストの現状からは、とりあえず「自己描写的な試み」と見做すのが妥当なようだ。では最後に、このようなスタイルをとるにあたってスタンダールが参照したと思われるモデルについて若干の私見を述べて、本稿を締めくくることにしたい。

チヴィタヴェッキア赴任以来、スタンダールは1度ならずモンテーニュの『エッセー』に目を通しているが、そのうちの1冊はメチルドとの思い出に密接にむすびつく特権的な書物でもあった。1832年2月、スタンダールはその余白につきのようなメモを残している。

わたしは、心を高まらせ、この本をひらく。それを買求めた時のこと、ミーナ・フォン・グリースハイムのこと、そしてとりわけメチル〔ド〕のことに思いを馳せながら。1821年6月13日、わたしは何たる状態だったか。<sup>23)</sup>

この時スタンダールが心に描いているのは、『エゴチズムの回想』第1章で中心となるエピソードであるのはいうまでもない。しかも、すでに1832年1月14日付のディ・フィオリ宛書簡において自伝執筆の計画が述べられている以上、とうぜんのことながらこの同年2月付のメモも『エゴチズムの回想』とまったく無縁だとはいえない。ルソーの『告白』、あるいは遺書や作中で名前が挙げられているチェッリーニやロラン夫人の自伝などと同じく、自己描写に分類されるこの書物のエクリチュールからも、この時期のスタンダールにとって得るところが少なからずあったとは考えられないだろうか<sup>24)</sup>。

## 註

- 1) 作品のテキストとしては、プレイアッド版 (STENDHAL, *Souvenirs d'égotisme*, in *Œuvres intimes II*, édition établie par Victor DEL LITTO. Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1982) を使用し、同版からの引用にあたっては、ページ数のみを [ ] 内に示す。なお訳出にあたっては、富永明夫訳『エゴチスムの回想』(富山房百科文庫, 1977年) を参照したが、文脈によっては筆者が改変をほどこした箇所がある。
- 2) Voir Henri MARTINEAU, *Le Calendrier de Stendhal*. Paris: Le Divan, 1950, p. 264. プロスペル・メリメは同年5月14日付のソフィー・デュヴォーセル宛の書簡のなかで、スタンダールが自分の運命を嘆き、まもなく自分は熱病で死んでしまうだろうと書き送ってきたことを伝えている。
- 3) STENDHAL, *Correspondance t. II 1821-1834*, préface par V. DEL LITTO, édition établie et annotée par Henri MARTINEAU et V. DEL LITTO. Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1967, p. 445.
- 4) *Idem*.
- 5) *Ibid.* pp. 711-712.
- 6) Voir V. DEL LITTO, «Préface» in *Souvenirs d'égotisme, Œuvres complètes t. 36*. Genève: Cercle du Bibliophile, 1970, p. II.
- 7) 『エゴチスムの回想』執筆における「読者」の重要性についてベアトリス・ディディエは、「読者の存在が、最初のページよりきわめて積極的で刺激的な価値を有している。2ヵ月来仕事をし損じたことを自責するスタンダールの心に〈書く勇氣〉を呼びおこしたのは、まさに読者にほかならない」と述べている (Béatrice DIDIER, *Stendhal autobiographe*. Paris: PUF, 1983, p. 303)。
- 8) STENDHAL, *Correspondance t. II 1821-1834*, op. cit., p. 441.
- 9) ミシェル・クルゼは、スタンダールがジウリアの癡病のことをおそらく知っていたであろうと推測している (Voir Michel CROUZET, *Stendhal ou Monsieur Moi-même*. Paris: Flammarion, «Grande Biographie Flammarion», 1990, pp. 601-603.
- 10) 1832年にスタンダールの「晩年」の意識のはじまりをみる示唆的な考察に、つぎのものがある——西川長夫『スタンダールの遺書』, 白水社, 116-117頁。
- 11) Voir Georges MAY, *L'autobiographie*. Paris: PUF, 1979, pp. 48-59.
- 12) STENDHAL, *Correspondance t. II 1821-1834*, op. cit., p. 446.
- 13) これは前掲訳の「解題」のなかで、訳者富永が『エゴチスムの回想』において「スタンダールは自己の過去を語ったのではない、回想する自己の現在を語ったのだ」と指摘した際にもちいた表現であり、もちろん、われわれはその意味をずらしている (前掲書, X頁)。
- 14) 『エゴチスムの回想』の第6章までの構成は、「友情」、「恋」、「社交」、「イギリス」

- というように、編年史的というよりむしろ主題別に配列がなされている。Voir Gérard RANNAUD, «Le Moi et ses figures, *Souvenirs d'égotisme et Vie de Henri Brulard*», in *Stendhal et les problèmes de l'autobiographie*. Grenoble: Presses Universitaires de Grenoble, 1976, p. 100; Cf. V. DEL LITTO, «Préface» in *Souvenirs d'égotisme, Œuvres complètes t. 36*. op. cit., p. XV.
- 15) ルジュンヌは、『エゴチスムの回想』が作者の人生を幼年期と成長において考察していないため「自伝」の条件を満たすものではないと考えている (Voir Philippe LEJEUNE, «Stendhal et les problèmes de l'autobiographie», in *Stendhal et les problèmes de l'autobiographie*. op. cit., pp. 22-24)。
  - 16) Voir Michel BEAUJOUR, *Miroirs d'encre, Rhétorique de l'autoportrait*. Paris: Éd. du Seuil, 1980, pp. 7-26.
  - 17) ロンドン娼婦の挿話におけるスタンダールの感受性のあり方については、つぎの論者が示唆的である——中川久定『自伝の文学——ルソーとスタンダール』, 岩波新書, 1979年, 122-124頁参照。
  - 18) STENDHAL, *Correspondance t. II 1821-1834*, op. cit., pp. 441-442.
  - 19) Voir Jean-Pierre RICHARD, «Connaissance et tendresse chez Stendhal», in *Stendhal et Flaubert, Littérature et sensation*. Paris: Éd. du Seuil, coll. «Points», [éd. 1970], pp. 17-133.
  - 20) Voir B. DIDIER, «Le manuscrit des *Souvenirs d'égotisme*», in *Stendhal, Écritures du romantisme I*. Paris: Presses Universitaires de Vincennes, 1988, p. 81.
  - 21) 草稿の移植や加筆などの情報については、つぎの版を参照した (Voir STENDHAL, *Souvenirs d'égotisme*. texte établi et annoté par Pierre MARTINO, Paris: Bibliothèque des Éditions Richelieu, 1954, p. 284 et p. 391.
  - 22) Voir V. DEL LITTO, «Préface» in *Souvenirs d'égotisme, Œuvres complètes t. 36*. op. cit., p. XIX-XX.
  - 23) STENDHAL, *Journal (1818-1842)*, in *Œuvres intimes II*, op. cit., p. 159.
  - 24) 『エセー』についてフィリップ・ルジュンヌは「継続する物語も、パーソナリティーの秩序だった物語もない」として「自伝というよりもむしろ自己描写」であるとしている (Ph. LEJEUNE, *L'Autobiographie en France*. Paris: Armand Colin, coll. «U 2», 1971, p. 57)。また、ジョルジュ・メはイタリアの自然哲学者カルダーノの自伝における主題別の叙述構成について触れながら、『エセー』もまた「肖像 (ポルトレ)」に「自伝」が混じった同種の例として挙げている (voir G. MAY, op. cit., p. 69)。以上の特徴は、すでに検討したように『エゴチスムの回想』にも認められよう。